

新田次郎

武田勝頼

(二) 水の巻



講談社

武田勝頼 (二) 水の巻

著者 新田次郎

定価 九八〇円

昭和五十五年四月二十三日 第一刷発行
昭和五十五年六月十三日 第三刷発行

発行者 野間省一

発行者 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二丁目二二

郵便番号 一一二

電話 (〇三) 九四五一一二二 (大代表)
振替 東京八一三九三〇



印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

©新田次郎 Jiro Nitta 1980 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

目次

佐久間信盛変心

機密書類入手

奸謀好餌

武田信実よりの使者

鳶ノ巣山城の血戦

馬を狙えとの下知にて候

旗幟ひらめく設楽ヶ原

山県昌景の死

敗　　走

落武者哀れ

高坂弾正の献策

木曾馬献上

7

16

26

37

47

57

68

78

88

98

108

118

諏訪原城明けわたし

128

岩村城信長の背信

138

腹が減つては戦ができぬ

149

築城、葬儀、西東

159

大坂表海上木津浦沖大海戦始末

169

十四歳の花嫁御寮

179

梟雄松永弾正最期の日

189

越中五箇山の塩硝製法探索の次第

200

御館おたにの乱

210

黄金二万両

220

景虎の最期

230

装丁
川田
幹

武田勝頼

(二)水の巻

佐久間信盛變心

鳥居強右衛門が処刑されたところから、武田軍の長篠城攻撃は急にゆるやかになった。強右衛門が長篠城を脱出した十四日の夜には、あと二、三日で落城という情勢であったのに、強右衛門が処刑された十六日以後から武田軍が積極的に攻撃しなくなったのは何故であろうか。

長篠城趾史跡保存館館長丸山彰^{あき}氏はこの問題について、「城兵五百が、一万五千の大軍に囲まれながら、よくこれを守り通した要因は何であったか。武田軍は一週間の猛攻で、城兵を周囲五百メートルほどの小区域に押しこめてしまった。もう一押しで落城したのであろうのに、それができなかったほんとうの理由は何か」

と「歴史読本」昭和五十年六月号の特集「長篠の戦い」の中で述べている。氏は現地において長篠城攻略戦及び設楽ヶ原の戦いの研究にその生涯をかけている郷土史家である。丸山氏が指摘しているとおり、長篠城は落城寸前であった。それなのに落城しなかったのは、

（長篠城が落城すれば、織田勢はこの前の高天神城のとき

と同じように、援軍の使命を失ったと称して、さっさと岐阜へ引き揚げてしまおう。そうなれば、織田軍と戦うことがでなくなる。この際織田、徳川連合軍に大打撃を与えなければ、彼等はますます増長し、ついには手に負えないものになるだろう）

これが武田方の部将たちの総合した見解であり、（織田信長を引き寄せるためには長篠城をもうしばらく生かして置く必要がある）

という結論に達していたからである。急に武田方の攻撃が弱くなったので、長篠城内の将兵はむしろ奇怪にすら感じたであろう。

武田軍が長篠城攻撃の手抜きをしているという報は直ちに、織田軍及び徳川軍の知るところとなった。

「勝頼は飽くまでやる気なんだな」

織田信長はその情報を十六日の夕刻牛久保城で聞いたときつぶやいた。勝頼が全軍を挙げて迎撃に来るならば、それこそ味方にとって有難いことで、この時点で既に戦略的に連合軍が有利に立っているのだと思った。

織田信長は丸毛兵庫と福田三河守を牛久保城警固のために置き、その翌朝、野田に向った。

（信長は敗戦となったときのことを考慮して、丸毛兵庫と福田三河守を牛久保城に入れたらしい）

という情報が武田の陣営にもたらされた。このような風説をばらまかせたのは、織田信長自身であった。織田信長

はおっかなびっくり、それでも徳川家康との盟約の手前、軍隊を引き揚げることもできずに、長篠へ向って進軍中であるというふうには武田軍に思わせるため、あらゆる手段を用いたのである。

棒と縄束なまなはを持たせられた織田軍三万五千の軍兵もまた、直径三寸長さ六尺の棒に嫌気がして、士気がさっぱり上がらなかった。

「合戦の前から馬塞うまぎの棒をかついで歩くなどというばかばかしい戦があるものか、これでは初めっから逃げ腰と云われてもしようがあるまい」

と洩らす兵もいた。こんなことが部将の耳に入ったらたいへんなことになるのだが、兵ばかりではなく、その上に立つ多くの者も同じような気持でいるから、信長の命令を批判するようなこの言葉も平然ととり、はては、

「そのうち長篠城が落ちるさ。そうしたら棒を捨てて身軽で帰れる」

と私語する兵もいた。これらの兵の中には武田方からの廻し者がいた。情報はそのまま武田陣に、

(織田軍の兵は戦意全くなし)

と伝えられた。

十七日、織田信長が野田ヶ原に陣を敷いてからは警戒は異常なほど厳重になった。武田軍の奇襲に備えての見張り、物見もまた多く放たれた。

十七日の夜、信長は織田掃部忠寛を呼んで密談した。

織田掃部忠寛は、永禄八年(一五六五)信長の使者として、古府中に武田信玄を訪問して以来、武田家との外交を一手に引き受けていた人物である。信長の養女(信長の姪)雪姫と勝頼との結婚にも一役買ったし、元龜三年(一五七二)十二月、信玄の部将秋山伯耆守信友が伊奈衆を率いて美濃へ侵入し岩村城を攻め落し、城主遠山景任の未亡人ゆう女(信長の叔母)と結婚した際も、仲介の労を取ったのは掃部であった。武田家の使者が岐阜に行ったときもその嚮導役をつとめたし、織田と武田との関係が危機に瀕してからも、しばしば信長の内意を帯びて武田家の要人と会っていた。

信長は掃部のような武田通を置いて、いざというときに備えていたのである。

信長と掃部との密談の内容については誰も知ることができなかったが、掃部が信長のところを辞したその足で、佐久間信盛の陣を訪れたことからみて、掃部が信長の命をひそかに信盛に伝えたものようであった。

十七日から十八日にかけて織田軍、徳川軍の移動は急で、織田軍、徳川軍の物見、大物見は野田から設楽ヶ原の間を間断なく往復し、更に連吾川、五反田川を越え、寒狭川の近くまでおもむき、しばしば武田軍の物見と衝突した。「敵は設楽ヶ原の東、高松山附近に馬塞うまぎの柵を設けております」

という第一報が武田の本陣についたのは十八日の朝であ

った。そのころ、織田軍の陣営に潜入していた武田方の間者、望月正九郎は佐久間信盛の供の一員として、信長の本陣に向っていた。軍議に列するための信盛は馬上にあって雨に濡れていた。

望月正九郎はもともと駿河の関口氏に仕えていた。後、徳川家の家臣となり、元亀三年三方ヶ原の戦いの折には、佐久間信盛の陣営に加わっていた。徳川軍が敗戦となつて敗走中に、武田方に捕われたが、望月正九郎を知っている者が武田の陣営にいたのでその者の口添えで生命を助かり、武田家のために働くという誓紙を入れて許された。彼は一日遅れて佐久間信盛の陣に到着した。鎧の袖は千切れ、全身返り血を浴びていた。誰も彼を疑う者はなかった。

望月正九郎と同じような状態のもとに織田軍、徳川軍に潜入している者は数十人もいた。武田信玄は将来のことを考慮して、敵中に間者を置くことに非常に熱心だった。その効果がこの際現われて来たのである。敵中深く潜入している者がいても、得られた情報を速かに伝達する役目が必要。これは武田家自慢の諸国御使者衆の組織に負うより仕方なかった。

連日の雨だった。その日も朝からかなり強い雨が降っていた。信長の本陣設楽村極楽寺山に伺候した佐久間信盛等は、折から雨が激しいので本陣は一時的に八剣社に移動したと聞いて、その方へ回った。その朝の諸將の召集目的

は、強敵武田勝頼を前にしての軍議であった。部將は既に全員が集り、信長は未だに現われない佐久間信盛をいらしながら待っていた。

「信盛はどうした」

と家臣に三度目に訊いたとき、信盛が現われた。

「遅いぞ信盛、肥り過ぎて身のこなしが大儀なら、牛久保あたりまでさがって、城の番でもするがよい」

信長は信盛を大声で叱った。部將が居並ぶ中で大声で叱るほどのことはなかった。信盛は一瞬顔色を変えた。

この信長が大声で信盛を叱りつけた声を、八剣社まで信盛を送って来た望月正九郎が聞いた。間もなく軍議が始まったから、彼等はその場から遠ざけられたが、信長に面罵されたあとの信盛がどうなったか気になってしょうがなかった。

軍議が始ったが、それは軍議ではなく信長の作戰命令の伝達であった。軍の配置は信長が決めた。それぞれの軍隊が南は川路村の連吾橋から北は丸山あたりまで二十余町の間に、馬塞ぎの柵と、乾堀を設けるように信長は諸將に命じた。

連吾川を前にして連合軍の配置は右翼が徳川軍、左翼が織田軍であり、その織田軍の最左翼が佐久間信盛の指揮する約四千の軍勢であった。

「果して武田軍は攻撃して来るでしょうか」

信長の独断的作戰命令に対して、部將を代表して羽柴筑

前守秀吉が発言した。

「必ず突込んで来る」

信長は自信ありげに云った。馬塞ぎの柵が設けられ、乾堀を掘られてしまえば、武田軍に不利である。しかも連合軍には三千挺の鉄砲がある。果して武田軍が決戦に出るであらうか——そう思っているのは秀吉一人ではなかった。信長が必ず突込んで来るといった自信はいい何から得られたものだろうか、諸將はそれを考えていた。座がしんとなった。

「信盛、そちは三方ヶ原の合戦の時も最左翼を守った。今度もまた最左翼である。武田の騎馬隊の強さを知っている。そのことから防ぎようも攻めようも心得ているだろう。充分に働くがいい。ただ一つ、注意して置くが、今回は絶対に逃げることは許さないぞ」

三方ヶ原の合戦の折、武田の騎馬隊を見て、一戦も交えず逃亡した佐久間信盛の率いる一千余の部隊の敗走の様相をつぶさに調査した信長は、それを持ち出して皮肉を云ったのである。信盛に満座で恥をかかせたのである。

部将たちははっとした。信長の性格を理解しているつもりでも、このようなことを平気という信長にいささか反感を感じた。冷酷な人だと思った。自分を信盛の立場に置いて考える者もいた。

信盛は一言も発せず黙っていた。たまりかねて秀吉が話題を変えた。

「武田が攻め寄せて来るのは何時でしようか」

「それは馬塞ぎの柵ができ上ってからだ」

「それでは武田に損ではございせんか」

「そうだ。武田が決戦を挑むならば今だ。われらがまだ布陣を完全に終らない今、突撃に出て来たら、手強い敵になるだろう。しかし、武田はそうはしない。勝頼が攻撃をかけて来るのは柵を設けた後である」

はてなという顔で秀吉は信長の顔を見た。その顔に信長は答えて云った。

「余は猿智慧の戦はせぬ、人間の頭を使った戦をしたい。その意味が分からぬか」

だが秀吉には信長の心を覗くことはできなかった。

「軍議はこれで終る。各自部署について柵の組み上げや乾堀掘りに精を出すように」

信長は立ち上った。

佐久間信盛は悄然として、八剣社を出た。秀吉が傍に寄って行ってなぐさめた。

「お館様はぼんぼん云われるけれど、心の中ではそれほどことにこだわってはおられない。そのうちまた景氣よく讚められることもあるから、あまり深くお考えにならぬように」

「深く考えるなと云われても、……忘れよと云われても、武士たる者が満座の中で恥をかかされてこのまま黙っておられようか。……いったい、貴公ならばこんなときどうな

さる」

そう反問されて秀吉はびっくりして答えようがなかった。

「こういふときは、腹を切るか、裏切るか、どっちかだ」
信盛はかなり大きな声で云った。秀吉があわてて、信盛の口を制した。軍議は終わった。各部将はそれぞれ供にかこまれて、自分の陣地へ帰ろうとしていた。その附近にはあまりにも人の目が多すぎた。

佐久間信盛は降りしきる雨の中で、馬に乗った。思いつめてゐる顔だった。望月正九郎は、信盛が信長に叱られた声をはっきり聞いたし、信盛と秀吉との会話も聞いた。信盛が部将たちの前で、信長に面罵されたばかりではなく、恥をかかされたことは明白だった。

正九郎はこの新しい情報を速かに武田の陣営に伝えたかった。彼は佐久間信盛の陣中に役夫として雇われている人数の中に諸国御使者衆の者が数人まぎれこんでいることを承知していた。役夫とは軍の移動に追従しながら働く雑役夫である。荷を運んだり、穴を掘ったりの軍夫で、戦闘に参加することはなかった。正九郎はそれらの数人のものが誰の輩下となつてどこで働いているかをおおよそ知っていた。彼等には共通の目印があった。笠に南無八幡、八幡大菩薩、八幡太郎、八幡神社など八幡にちなんだ字が書かれていることが目標の一つ、笠をかぶっていないときは着物の左裾に焦跡を残しているのが目じるしだった。その目じ

るしは上部からの指令で時々変つた。

馬塞ぎの柵作りと乾堀掘りの仕事が始まるので陣中は騒然としていた。望月正九郎はその混雑にまぎれて諸国御使者衆を探した。その一人に間違ひなしとかねて目をつけていた男が鉞をかついで歩いていくのを見掛けた。

「ちょっと待て、どこかで会つたような顔だな」

その正九郎の呼掛けに男は立ち止まって答えた。

「へい、私もどこかであなた様にお会いしたことがあるように存じます」

男は頭を下げて、笠に書いてある八幡大菩薩の字を正九郎に向けた。

「会つたのは遠州井伊谷ではなかったか」

「たしかに井伊谷でございました」

男は更に近づいて来た。

「そちの生れはどこだ」

「郡内の生れでございます」

男はそう云つて正九郎の足元にひざまずいた。正九郎は男を指して、なにかその男の過失をとがめるような、そぶりを見せながら早口に云つた。

「名乗るがいい」

「諸国御使者衆奥山組の古屋惣兵衛」

と男は云つた。

「よし、すぐ走れ、確実に伝えろ」

そう前置きして、今朝本陣で見たこと耳にしたことを手

短に伝えた。

人が近づいて来た。正九郎は威丈高になって叫んだ。

「行け、再び粗相があつたら許さぬぞ」

惣兵衛は何度も正九郎の前に頭を下げてからその場を去った。望月正九郎と惣兵衛との会話は自然に出たのではない。見たことがある顔、井伊谷ではなかったか、その生れは、郡内の生れですまで、すべて一連の合言葉であつた。こうして念入りに相手を確かめてから用向きを伝えた。

惣兵衛は間もなく陣中から姿を消した。一度姿を消せば、あやしまれて、その場にはおられなくなる。正九郎は今朝方知ったことを重大事と見て惣兵衛を走らせたのである。

医王寺の武田勝頼の本陣では惣兵衛によって伝えられた望月正九郎からの伝言を重視した。

「佐久間信盛が信長にひどく叱られたらしい。信盛はこれに腹を立てて、秀吉に、腹を切るかをむくかどっちかだとも云っていたそうだ」

勝頼は穴山信君に早速この話を伝えた。

「望月正九郎からの情報ならば、確かなもの、だがその信盛をどうやって味方に引き入れるか……」

信君は頭をひねった。

それまでも、信長と家康の仲がうまく行っていないとか、信長は参戦してはいないなどという風説が次々と入っ

て来たが、取り上げられるべきものはなかった。信長と信盛との間がうまく行っていないという風説はことさらに新しいものではなく、三方ヶ原の戦いがあつた直後から、信盛改易の噂は流れていたが、今朝のような生々しい情報が入つたのは始めてだった。

軍議が開かれた。

連合軍の意図がはっきりした以上、武田軍として為すべきことは、馬塞ぎの柵ができないうちに攻めかかるか、それとも馬塞ぎの柵が出来るのを待って設楽ヶ原へ兵を進めるかどっちかであった。

真田昌幸や曾根内匠等若手参謀たちは、柵や乾堀ができではどうにもならぬ、直ちに攻撃すべきであると主張したのに対して、武田信玄以来の宿将や御親類衆は、相手は四万を越す大軍、馬塞ぎの柵を作ったり、乾堀を掘らせているのは、武田軍を誘うためである。うっかり手出しはできない。もうしばらく敵の出方を見るべきだと主張した。

勝頼は真田昌幸や曾根内匠等と同意見だったが、軍議の性格上、強いて自説を強行できなかった。彼は御親類衆のうちの実力者、穴山信君に意見を求めた。

「はや、軍議は決したも同然、ここは自重して敵の出方を見るべきでしょう」

信君は勝頼の心の中を百も承知の上でそう云った。

「むぎむぎと狙上の魚を逃せよと仰せられるのか」

真田昌幸は絵図面上の連合軍を鉄扇で叩きながら云っ

た。

「ひかえよ、昌幸、言葉が過ぎるぞ」

真田昌幸の兄の信綱が昌幸を制した。

昌幸が沈黙すると、もはや誰一人として発言する者はいなかった。

「では、しばらくこのまま、模様を見ることにするが、各部隊は寒狭川を渡って設楽ヶ原に一氣に出られるよう、その工夫に油断なきこと」

勝頼は結論を云った。

もし、この時勝頼が昌幸の説を入れて、攻撃に出たとしたら、設楽ヶ原の戦はまた違ったものとなったであろう。連合軍は雨が降っているから鉄砲は使えない。馬塞ぎの柵は不完全だから、打ちこわされるに違いない。武田の騎馬隊はこぞって信長の本陣に突進したかもしれない。

梅雨のために増水した寒狭川を一万五千の軍が一氣に渡することは困難であったので、武田勝頼は連合軍が近づいたという情報を聞くと、各部將に命じてただちに、渡河作戦に兵力を集中した。

筏を岸につなぎ止めてこれを浮き橋にして渡河する方法、川幅のせまいところは吊り橋をこしらえた。激流をさけての浮き橋作りや、断崖にかけられた吊り橋作りは十八日までには略々完成されていた。渡河点は数ヶ所設けられていた。渡河しようとすればすぐできた。

十八日の夜になって、穴山信君が医王寺の武田勝頼の本

陣を訪れた。百姓姿の男を連れていた。雨の中を遠くから来たらしく男は濡れていた。

「この者は佐久間信盛殿の家臣佐久間三左衛門と申すもの、織田掃部殿より拙者あての書状を持ってさきほどわが陣中に至りましたので、早速ここに連れて参りました」

信君は佐久間三左衛門を連れて来た事情を簡単に説明し、織田掃部から穴山信君にあてた書状をそこに置いた。

勝頼はそれに目を通した。佐久間三左衛門を信君に紹介し、この者は佐久間信盛の書状を持参しているから、速かに勝頼公にお引き合わせ願いたいと書いてあった。勝頼はその書状を信君に返すと、

「しばらく会わないが、掃部は元気か」と三左衛門に訊いた。

「はい、お元気でありますが……」

後は云わなかった。「岩村城のこと以来、信長殿にうとんぜられているのとだが」

という三左衛門は、

「さようでございます。ようやく息をしているような様で見えるもお気の毒……」

と後を濁した。

勝頼にとって織田掃部はなつかしい人であった。雪姫との縁談の使者以来、彼はしばしば甲斐へ来ていた。結婚式のときも信勝が生れたときも、高遠城へ来た。雪姫が死ん

だときには、勝頼以上に嘆き悲しんだ男である。織田家きつての武田通である。秋山信友と遠山景任の未亡人ゆうとの結婚は、こうすれば織田と武田の間が将来ともうまく行くだろうと思つてしたことだが、後でこれを知つた信長はひどく怒つて、織田掃部を罵倒したということを聞いていた。

「さて、掃部がなにを云つて寄こしたのかな」

彼はそう云いながら、佐久間三左衛門が差出した二通の書状のうち、まず織田掃部の書状を開いた。

織田掃部は型通りの挨拶文をしたためたあとで、信長にうとんじられて以来の身の不幸を嘆き、願うことなら武田家へ奉公をと考えていると心情を吐露し、同じようにつらい立場にいる佐久間信盛に触れ、

「佐久間殿は今朝方、いささかの遅刻を理由に諸将の前でお館様に面罵されたばかりでなく、このたびの武田との戦いでは三方ヶ原の合戦の時のように逃亡まかりならぬときめつけられた。佐久間信盛殿はこれほどの恥をかかれて尚且つ、信長に奉公するつもりはなくなつたから、この度の戦いには、武田方に味方して、必ず武田勝頼殿を勝將軍にしたいからぜひ味方に加えていただきたいと云つてゐる。織田方重代の部将の佐久間信盛殿が決心したことだから、疑う余地はない。よろしくお願いしたい」と書いてあった。

次いで勝頼は佐久間信盛の書状を開いた。内容は意外に

簡単だった。

「くわしくは織田掃部殿からの知らせのごとくである。意を決して誓書をしたため、武田に味方することにした。もう後に引き返すことはできぬ。よろしくお引き廻し願ひたい」

という意味のことが固い字で記されていた。書状の他に誓書があった。

勝頼はそれを穴山信君の方に廻し、彼は、この夢のような話をどう解釈したらいいのか考へた。

（あまりにも、虫がよすぎるような知らせである。裏になにかありはしないか）

勝頼はそう考へながら穴山信君に目をやった。穴山信君は、信玄時代から外交問題を引き受けていた。他国の情勢にくわしいし、このような機密に属することも、幾つか手掛けてゐる。信君のほんとうの腹を訊いてみようと思つた。

勝頼は、家臣を呼んで使者の佐久間三左衛門を別室に引き取らせて、食事をすすめるように云いつけたあとで、穴山信君を近くに呼んで聞いた。

「信じてよいであらうか」

「この書状だけならば、疑いもいたしますが、今朝ほど、望月正九郎よりの通報が裏付けとなります。まずは信じてよいのではないかと存じます」

そう云われてみるとそうであった。望月正九郎が諸国御